

中学生の運動・スポーツ参加とジェンダー意識

— 因子分析を手がかりに —

比較教育社会学コース 羽田野 慶子

Japanese Teenager's Perceptions of Gender and the Relationship with Sport Activities :
Findings from a Factor Analysis

Keiko HATANO

The purpose of this paper is to make clear the plural structures of femininity and of masculinity, and to investigate how sport activities influence the ways in which Japanese teenagers perceive gender, based on a questionnaire survey in junior high schools in Tokyo.

By factor analysis of eight items of gender perceptions, these items were divided into three factors. Boys' gender perceptions consist of 'sturdiness', 'discontent with one's own sex', and 'male's superiority on intellectuality'. Girls' gender perceptions consist of 'acceptance to one's own sex', 'male's superiority on gender relationship', 'male's superiority on abilities'.

For boys, sports heighten their perceptions of 'sturdiness', whereas for girls, sport cause maladjustment to their own sex and have an effect of making their attitudes toward gender role conservative.

目次

はじめに

I 先行研究の整理と課題の設定

- A 心理学における「女性性」「男性性」研究
- B 社会学・教育社会学における性役割研究
- C 課題の設定

II 調査の概要

- A 調査方法・対象
- B 調査対象者の基本的属性・特性
- C ジェンダー意識の概要

III 分析結果

- A ジェンダー意識の構造
- B ジェンダー意識と属性との関係

IV 考察

おわりに

はじめに

Butler に代表されるポストモダン・フェミニズムは、「セックス」=生物学的性／「ジェンダー」=社会的・

文化的性、という従来のジェンダーの捉え方を批判し、「セックス」もまた、二項対立的な「ジェンダー」という枠組みによる実践の産物である、という知見をもたらした。この認識の転換は、身体的なレベルの差異が、ジェンダー形成にどのような意味を持っているのか、ということに着目する視点をもたらす。つまり、ジェンダーを形成する意識と身体との相互連関を捉えようとする視点を提示したといえる。

一方、Connell は、「女性－男性」という二分法的なジェンダーの捉え方を批判し、「女性性」「男性性」の多元性を指摘している。

本研究では、社会化の途上にある中学生を対象とし、彼女ら／彼らのジェンダー形成において、身体的な要素が、多元的な「女性性」／「男性性」のどのような側面にかかわっているのかについて、仮説生成的な分析を試みる。

I 先行研究の整理と課題の設定

A 心理学における「女性性」「男性性」研究

心理学の領域では、1930年代から「女性性」／「男性性」の度合いを測定する心理検査（masculinity－femin-

inity test)が開発され、さまざまな検査方法が考案されてきた。1960年代までに考案されたこの種の心理検査は、「女性性」と「男性性」を対概念として捉え、一元的かつ連続的な尺度によって、個人の人格特性が「女性的」であるか「男性的」であるかを判別することが可能であるという強い前提のもとで開発されたものであった。

1970年代になると、一個人が女性性と男性性の両方を兼ね備えているという心理的両性具有性 (psychological androgyny) という考え方が広く受け入れられるようになる。Bemは、それまで同一次元の両極にあると考えられてきた「女性性」／「男性性」をそれぞれ独立した別次元のものと捉え、「女性性」尺度と「男性性」尺度を別々に用意することによって、両性具有を測定する性役割測定尺度を開発した。以来、「女性性」「男性性」を異なる次元のものとして捉えた性的ステレオタイプ研究が蓄積されてきた。

しかし、コンネル (訳書1993) は、そのような性的ステレオタイプ研究に対して疑問を投げかける。「女性性」／「男性性」をそれぞれの尺度得点によって測定する場合、具体的には項目ごとの得点を合計するという手段がとられる。しかし、そのような方法では「それぞれの質問がもっていた固有の意味は無視されてしまう」し、「もしも回答者が関連項目で逆の回答をしても、それはたとえばアンビバレンスの問題としてはとらえられない。」(252-253頁) という問題がある。「女性性」も「男性性」も、それぞれ一元的に測定可能なものであるという前提には実際的な根拠があるわけではなく、それぞれ多元的なモデルとして想定することができるのである。

B 社会学・教育社会学における性役割研究

社会学の領域では、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業を批判するフェミニズムの立場から、女性の性別役割観を問題にした研究が行われてきた。特に、教育社会学では、女子の進学意識や職業意識が、アカデミック・アチーブメントだけではなく、性別役割観によっても影響されていることが実証されており、性別役割観が母親の就労形態によって大きく影響を受けることも指摘されている (中西 1998, 吉原 1995)。ただ、そこでは進路展望や職業選択といった女子の将来観の分化を解明することに主眼をおいているため、「性別役割観」は一元的な変数としてとらえられており、「女性性」の中に含まれる多元性という問題や、「女性性」をめぐる個人の内部矛盾といった問題の解明には至っていない。

大和 (1995) は、既婚女性の性別役割分業意識が「性による役割振り分け」と「愛による再生産役割」という独立した二次元によって構成されていることを示唆している。また、山口 (1999) や尾嶋 (2000) も、既婚女性を分析対象とした研究の中で、家庭での性別役割分業に対し否定的な意識を持ちながら職業世界への進出にも消極的であるという、ある種の矛盾を抱えた女性が一定の割合で存在することを示している。

このように、社会学・教育社会学の領域では、「女性性」／「男性性」の中でも特に性別役割分業に対する意識が主要な研究テーマとなっており、その範囲では、意識の多元性や異なる項目間のアンビバレンスといった問題が明らかにされている。しかし、性別役割分業意識を含む総体としての「女性性」／「男性性」じたいの持つ多元性という問題設定は、今のところ見当たらない。

C 課題の設定

そこで、本研究では、性別としてのジェンダー、あるいは関係としてのジェンダーにかんする意識を総体的に示す概念として「ジェンダー意識」という語を使用し¹⁾、複数の「ジェンダー意識」項目を用意することによって、「ジェンダー意識」内部の多元性を明らかにすることを第一の課題とする。さらに、多元的な「ジェンダー意識」のいかなる側面が身体的な要素と関連しているのかを明らかにすることを第二の課題とする。本研究では、身体的な要素を測る変数として、「運動能力の自己評価」と「運動部活動への参加」の二つを挙げたが、これらはいずれも「身体的な要素」という語で表されるべき多様な要素の中の一側面にすぎない。ただし、本研究では中学生という年齢段階や学校文化における「運動」の意味の大きさを考慮し²⁾、これらの変数に焦点を絞って分析を行う。したがって、「運動」にかんする変数によって「身体的な要素」のすべてを代表させる意図はないことをあらかじめ断っておく。

II 調査の概要

A 調査方法・対象

本研究で使用するデータは、1999年2～3月に行った東京都内の公立中学校6校の2年生を対象とする質問紙調査のデータである。調査方法は学校通しによる教室での集合自記式であり、男子479名、女子433名、合計912名のサンプルが得られた。なお、この調査は西島央、藤田武志、矢野博之、荒川英央各氏との共同研究によるものである³⁾。

表Ⅱ-1. 基本的属性・特性の男女別クロス表

		男子	女子	全体	カイ2乗値	有意確率
成績	上位	29.1	25.7	27.5		
	中位	33.7	36.1	34.8		
	下位	37.2	38.2	37.7		
	度数	478	424	902	1.358	.507
運動能力	得意	51.8 >	35.1	43.8		
	普通	28.6	35.3	31.8		
	苦手	19.6 <	29.6	24.3		
	度数	475	433	908	26.859	.000
部活動	運動部	83.5 >	49.1	67.2		
	文化部	16.5 <	50.9	32.8		
	度数	424	381	805	107.804	.000
進路希望	高卒後就職	25.6	19.3	22.6		
	専門学校	21.1 <	33.4	27.0		
	短大	6.1 <	16.8	11.3		
	四大	47.2 >	30.4	39.1		
	度数	394	368	762	47.334	.000
結婚後の女性の就業に対する希望	結婚中断	12.6	10.4	11.4		
	出産中断	23.4	16.2	19.5		
	中断再就職	38.1 <	49.7	44.5		
	就業継続	25.9	23.7	24.7		
	度数	286	346	632	9.912	.019

(数字は%)

B 調査対象者の基本的属性・特性

本節では、分析に先だち、調査対象者の基本的属性・特性として、①成績の自己評価、②運動能力の自己評価、③部活動への参加、④進路希望、⑤女性のキャリア・パターンに対する希望、の5つの項目について確認しておく。

表Ⅱ-1は、①～⑤の属性・特性を男女別にクロス集計した結果である。

1 成績、運動能力の自己評価

本調査では、成績と運動能力について、それぞれ5段階の自己評価で回答してもらった。表Ⅱ-1に示したのは、成績と運動能力の自己評価の5段階を3段階にリコードし、男女別にクロス集計した結果である。成績に関しては分布に男女差は見られないが、運動能力に関しては女子がほぼ均等に3段階に分布しているのに対し、男子は5割以上が「得意」にカテゴライズされるという偏りが見られる⁴⁾。

2 部活動への参加

次に、学校生活の中で時間的に大きな比重を占めると思われる部活動への参加状況を確認しておく。男女とも約9割がなんらかの部活動に参加しているが、参加の内訳は男女で異なっている。男子は部活加入者の8割以上が運動部に所属しているのに対し、女子は運動部と文化部の所属がほぼ半々になっている⁵⁾。

また、所属部活動(運動部/文化部)と運動能力の自己評価とのクロス集計を取ってみると、男女とも運動が得意であるほど運動部に所属する傾向が見られるが、男子の場合は「苦手」な者でも5割以上が運動部に所属しているのに対し、女子では「苦手」とする者の8割弱が文化部に所属しているという違いが見られる。

3 進路希望

進路希望は、「中卒後就職」「その他」「考えたことがない」という回答を除外し、「高卒後就職」「専門学校」「短大」「四大」の4つの選択肢にかんして、男女別にクロス集計した。全体で見ると四大希望者が最も多いが、男女別にみると、男子では四大希望者が5割弱でやはりもっとも多くなっているが、女子では四大よりも専門学校希

望者がもっとも多くなっている。また、男子は「高卒後就職」が2番目に多いのに対し、女子では短大希望者が一定の割合を占めている。

成績との関係のみてみると、男女とも、成績上位者ほど進路希望も高いが、男子の場合、成績中位者でも5割以上が四大を希望しているのに対し、女子では成績中位者のうち四大希望は約4分の1にとどまっております、代わりに短大や専門学校の希望者が多くなっている。成績下位になると、女子は専門学校希望と高卒後就職希望が3割内外ではほぼ同数だが、男子では高卒後就職希望が4割以上を占めている。

4 結婚後の女性の就業希望

結婚後の女性の就業に対する希望については、「結婚したら仕事をやめる」(「結婚中断」)、「子どもが生まれたら仕事をやめる」(「出産中断」)、「子どもが生まれたら仕事をやめ、大きくなったらまた仕事をする」(「中断再就職」)、「ずっと仕事を続ける」(「就業継続」)、「考えたことがない」という5つの選択肢のうち、女子に対しては「自分がそうしたいと思うもの」を、男子に対しては「自分の結婚相手にそうしてほしいと思うもの」を選んでもらった。その結果、男子の4割弱、女子の2割弱が「考えたことがない」と回答したが、これを除外した4つの選択肢について、男女別にクロス集計した。

男女とも結婚中断<出産中断<就業継続<中断再就職の順に多くなっているが、女子では5割近くが中断再就職を希望しているのに対し、男子ではやや結婚中断、出産中断に偏っている傾向が見られる。

成績との関係を見てみると、女子は成績上位者ほど就業継続を希望するものが多いが、男子では逆に成績下位者ほど相手に就業継続を希望する者が多く、成績中位・上位者では出産中断あるいは中断再就職を望む者が多くなっている。

C ジェンダー意識の概要

本研究では、「女性性」/「男性性」を多元的に把握しようとする目的から、複数の「ジェンダー意識」項目を用意した。ここで言う「ジェンダー意識」とは、個々人が自らの性別や両性の関係性に対して持っている意識やイメージの総称として用いることとする。ジェンダー意識には二つのレベルから捉えることができる。ひとつは、社会における両性の一般的な布置関係をどのようなものとして考えているか、というレベルであり、もう一つは、個々人が特定の性別であることに対する適応・満足、あるいは違和感・不満といった感覚のレベルである。前者を「対社会」のジェンダー意識、後者を「対自己」のジェンダー意識とまとめることができる。

本研究では、「対社会」、「対自己」それぞれ4つずつ、合計8つのジェンダー意識項目を設定した。まず、「対社会」のジェンダー意識として、①身体的能力における男性優位(「男は、女より体力がある」)、②知的能力における男性優位(「男は、女より頭がよい」)、③性別役割分業観(「結婚したら、男が外で働き、女が家で家事をするのがよい」)、④男性主導の恋愛観(「恋人ができたなら、男の子が女の子をリードすべきだ」)の四つを挙げた。「対自己」のジェンダー意識としては、⑤性別への適合に対する自己評価(「自分は女らしい(男らしい)と思う」)、⑥性別への不満(「女(男)に生まれて損をしたと思う」)、⑦異性への競争心(「男の子(女の子)に負けたくないと思うことがある」)、⑧性別への指向性(「生まれ変わるとしたら女の子(男の子)がよい」)の四つを挙げた。なお、質問紙上ではこれらの質問文に対し、女子はそのまま、男子はカッコの中を読んで答えるよう指示した。

表Ⅱ-2は、ジェンダー意識の各項目を男女別にクロス集計したものである。それぞれ4段階評価(「とても」)「まっ

表Ⅱ-2. ジェンダー意識の各項目と性別のクロス表

		男子	女子	全体	カイ2乗値	有意確率	度数
対社会	男の方が体力がある	78.8	86.6	82.5	9.616	.002	909
	男の方が頭がよい	17.7	18.9	18.3	0.238	.626	908
	結婚したら、男が外で働き、女が家で家事をするのがよい	46.8	30.7	39.1	24.684	.000	907
	恋人ができたなら、男の子が女の子をリードするものだ	63.2	59.4	61.4	1.421	.233	906
対自己	自分は女らしい(男らしい)と思う	45.4	28.3	37.3	28.258	.000	899
	女(男)に生まれてそんをしたと思う	23.6	64.8	43.3	154.978	.000	899
	男の子(女の子)に負けたくないと思うことがある	59.2	52.0	55.7	4.712	.030	897
	生まれ変わるとしたら今の性別がよい	86.1	47.9	67.9	121.168	.000	888

(数字は%)

たくそう思わない)で回答してもらったものを、肯定／否定の2段階にリコードした結果、肯定的な回答を示した者の割合を示している。

②知的能力の男性優位と④男性主導の恋愛観のほかは全て有意な男女差が現れており、特に「対自己」のジェンダー意識の各項目にかんしては、男子が概ね現在の性別を受け容れ、満足している様子が見え、一方で、女子は性別に対する不満や不適応を感じている者が多いことがうかがえる。

また、①身体的能力の男性優位にかんしては、男子より女子の方が肯定的に答える者が多く、体力的な部分での男子の優位性を、女子の方がやや過大評価している様子が見え、うかがえる。

③性別役割分業観については、男子の半数近くが肯定的な回答を示しており、女子の肯定的な回答の割合(約3割)を大きく上回っている。この点にかんしては、成人男女を対象とした調査でも同様の傾向が認められており、中学生段階で既にそのようなジェンダー・ギャップが存在していることが明らかになった。ただし、中学生にとって結婚後の性別役割分業よりも身近なジェンダー関係である恋愛に関しては、男女ともほぼ6割が男性主導の恋愛観を肯定しており、ジェンダー・ギャップが認められない。この点は、結果としての性別役割分業をもたらず要因の一つとして、どのような恋愛観を持っているかということが影響する可能性を示唆している。

Ⅲ 分析結果

A ジェンダー意識の構造

前章では、ジェンダー意識の項目ごとの集計結果を示し、男女別の回答の傾向を確認した。ここでは次に、ジェンダー意識項目が相互にどのような関連があるのかを明らかにするため、男女別にジェンダー意識項目の因子分析を行う。

8つのジェンダー意識項目について、「とてもそう思う」を4点、「まあそう思う」を3点、「あまりそう思わない」を2点、「全くそう思わない」を1点にリコードし直し、主因子法による因子分析を行った。バリマックス回転後の因子負荷量を示した結果が表Ⅲ-1とⅢ-2である。男女それぞれ3つの因子が抽出され、因子の構成は男女で異なっていた。

1 男子のジェンダー意識の因子分析

まず、男子の場合、第1因子は①身体的能力の男性優位、④男性主導の恋愛観、⑤男らしいと思う、等の項目

が高い負荷量を示していた。したがって、これを「身体的・精神的たくましさ」の因子と名付ける。この因子は抽出された因子の中でもっとも寄与率が最も高く、男子のジェンダー意識の中核をなす因子と見ることができるだろう。

第2因子は、⑥性別で損をした、の負荷量が最も高く、⑧生まれ変わっても今の性別(男)の負荷量がマイナスの高い値を示している。また、性別役割分業(③)や恋愛観(④)、男らしい(⑤)といった項目の負荷量もマイナスの値になっている。したがって、これを「性別(男)への不満」因子と名付けることとする。

第3因子は、②知的能力の男性優位や、③性別役割分業、④男性主導の恋愛観の負荷量が高く、他の項目は概ね負荷量が小さい。性別役割分業や恋愛観の負荷量が高いという点は「たくましさ」を示す第1因子と共通しているが、体力の男性優位や男らしさといった項目の負荷量が小さく、代わりに知的能力の男性優位の負荷量が高いのが相違点である。そのため、これを「知的能力の男性優位」因子と名付けておく。

男子のジェンダー意識から抽出された3因子を比較検討してわかったことは、第一に、「身体的・精神的」な男らしさを示す男性性(第1因子)と、知的能力の優位を基盤とした男性性(第3因子)は、ともに男性性への志向を示す因子であるが中身が異なっていることから、中学生男子にとっての「男性性」は少なくとも2つの軸を有しているということである。さらに、知的能力を基盤とした男性性よりも、身体的・精神的な側面での男性性の方が、かれらにとっての男性性の大きな要素になっているといえる。第二に、男という性別への不満(第2因子)と、男性性への志向を示すほかの二つの因子が、別々の因子として抽出されたということは、個人的レベルにおいて自己の性別(男)への抵抗を感じることも、「たくましさ」等の男性性を志向することとは両立しうることを示唆しているといえる。そして第三に、以上のことから、男子のジェンダー意識は、一元的尺度で十分把握できるものではなく、多元的構造を有していることが示唆されているといえよう。

2 女子のジェンダー意識の因子分析

次に、女子のジェンダー意識の因子分析の結果について解釈する。女子の場合も、男子と同様3つの因子が抽出されたが、因子を構成する項目の中身は全く異なっている。第1因子は、⑤～⑧の「対自己」ジェンダー意識項目において、いずれも性別(女)を受け容れるという方向に高い負荷量を有していることから、「性別(女)の

表Ⅲ-1. 男子のジェンダー意識の因子分析 (バリマックス回転後の因子負荷量)

	1	因子 2	3	共通性	平均値	標準偏差
男の方が体力がある	<u>0.542</u>	0.037	0.090	0.303	3.07	0.903
男の方が頭がいい	0.059	0.087	<u>0.410</u>	0.179	2.00	0.798
男は仕事女は家庭	0.414	-0.078	<u>0.512</u>	0.440	2.45	0.937
恋愛では男が女をリードするべきだ	<u>0.467</u>	-0.046	0.365	0.354	2.72	0.874
自分は男らしいと思う	<u>0.363</u>	-0.090	0.072	0.145	2.43	0.725
性別で損をした	0.144	<u>0.614</u>	-0.026	0.398	1.95	0.842
女の子に負けたくない	<u>0.534</u>	0.106	0.114	0.309	2.67	0.955
生まれ変わるなら男がよい	0.152	<u>-0.562</u>	-0.104	0.349	3.30	0.830
固有値	1.147	0.729	0.601	2.477		
寄与率 (%)	14.335	9.107	7.513	30.955		

第1因子……身体的・精神的たくましさ

第2因子……性別への不満

第3因子……知的能力の男性優位

表Ⅲ-2. 女子のジェンダー意識の因子分析 (バリマックス回転後の因子負荷量)

	1	因子 2	3	共通性	平均値	標準偏差
男の方が体力がある	0.006	0.156	<u>0.398</u>	0.182	3.26	0.724
男の方が頭がいい	0.015	0.135	<u>0.487</u>	0.256	2.05	0.641
男は仕事女は家庭	0.133	<u>0.529</u>	0.210	0.342	2.16	0.883
恋愛では男が女をリードするべきだ	-0.036	<u>0.675</u>	0.305	0.551	2.73	0.931
自分は女らしいと思う	<u>0.307</u>	0.270	0.006	0.167	2.13	0.693
性別で損をした	<u>-0.517</u>	0.041	0.045	0.271	2.75	0.826
男の子に負けたくない	<u>-0.299</u>	0.018	-0.187	0.125	2.57	0.946
生まれ変わるなら女がよい	<u>0.714</u>	0.303	-0.034	0.602	2.45	0.983
固有値	0.979	0.945	0.571	2.496		
寄与率 (%)	12.237	11.818	7.135	31.19		

第1因子……性別(女)の受容

第2因子……関係における男性優位

第3因子……能力の男性優位

受容」因子と名付ける。

第2因子は、③性別役割分業、および④男性主導の恋愛観の二つの項目で因子負荷量が高いことから、これを「関係における男性優位」因子と名付ける。この因子は、「女らしいと思う」「生まれかわるなら女」の2つの項目も高い因子負荷量を示しており、第一因子と正の関係にある因子とあってよいだろう。

第3因子は、①体力や②知的能力の男性優位を示す項目で負荷量が高く、④恋愛観でも若干負荷量が高く出ていることから、これを「能力の男性優位」因子と名付ける。この因子は、「性別(女)の受容」因子を構成する各項目の因子負荷量が概ね低く、「関係における男性優位」因子を構成する各項目の因子負荷量が一定の高さを有していることから、後者と正の関係にあるとあってよ

いだろう。

女子のジェンダー意識から抽出された3因子についていえることは次の3点である。第一に、「対自己」のジェンダー意識と「対社会」のジェンダー意識が別の因子として現れたことから、個人的レベルにおいて自己の性別に対して持つ感覚と、社会におけるジェンダーのあり方に対して抱くイメージは、必ずしも連続的な関係にはないということである。つまり、「女であること」を受け容れながらも性役割や男性優位の能力観を否定するというオプション、あるいはその逆のパターンがありうるということである。第二に、「対社会」のジェンダー意識が、「性役割の肯定」(第2因子)と「男性優位の肯定」(第3因子)という二つの因子として現れたことから、「対社会」のジェンダー意識には少なくとも二つの軸が存在

表Ⅲ-3. 男子のジェンダー意識の3因子と属性・特性との関係（平均，標準偏差，及び1元配置の分散分析の結果）

		度数	第1因子 身体的・精神的たくましさ		第2因子 性別（男）への不満		第3因子 知的能力の男性優位	
			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
成績	上位	131	0.08	1.34	-0.03	1.29	-0.22	1.84
	中位	152	0.07	1.51	0.16	1.41	0.10	1.64
	下位	166	-0.12	1.42	-0.12	1.37	0.08	1.63
	F値		0.971		1.648		1.543	
運動能力	得意	112	0.51	1.37	-0.05	1.42	-0.01	1.57
	ふつう	247	0.01	1.38	0.02	1.32	-0.01	1.77
	苦手	87	-0.69	1.38	0.04	1.44	0.02	1.68
	F値		18.458	**	0.136		0.01	
部活動	運動部	330	0.12	1.39	-0.07	1.33	-0.05	1.71
	文化部	70	-0.38	1.42	0.20	1.45	0.18	1.67
	F値		7.583	**	2.299		1.05	
進路希望	高卒後就職	98	-0.04	1.38	-0.10	1.54	0.15	1.57
	専門学校	80	0.22	1.52	0.19	1.40	-0.05	1.71
	短大	23	0.10	1.18	0.31	1.07	0.27	1.77
	4大	172	0.10	1.36	0.00	1.28	-0.09	1.71
	F値		0.51		0.975		0.655	
結婚後の女性の就業に対する希望	結婚中断	35	0.22	1.26	0.14	1.61	1.12	1.69
	出産中断	64	0.13	1.13	-0.12	1.43	0.35	1.65
	中断再就職	104	0.20	1.49	0.27	1.36	-0.10	1.51
	就業継続	68	-0.06	1.60	0.05	1.52	-0.12	1.90
	F値		0.509		1.027		5.635	**

** p < 0.05

するということである。これも、性役割を否定する一方で能力の男性優位を認める，というようなアンビバレンツの存在を示唆しているといえる。そして第三に，男子のジェンダー意識と同様，女子のジェンダー意識もまた，多元的構造を有していることが示唆されたといえる。

B ジェンダー意識と属性・特性との関係

それでは次に，因子分析で得られた各因子が，成績や運動能力などの基本的属性・特性とどのような関係にあるのかを確認する。表Ⅲ-3，Ⅲ-4は，ジェンダー意識の3因子について，成績，運動能力，部活動，進路希望，女性のキャリア・パターンへの希望の各属性・特性を独立変数とした一元配置の分散分析を行った結果である。

1 男子のジェンダー意識の各因子と属性・特性

まず，男子の場合，成績と進路希望は，いずれもどの因子とも有意な関係が見られない。一方，運動能力と部活動は，いずれも「身体的・精神的たくましさ」の因子（第1因子）と有意な関係がある。運動能力が高い方が，あるいは文化部より運動部に所属する者の方が，「たくましさ」の因子得点が高い傾向がある。

結婚後の女性の就業に対する希望は，「知的能力の男性優位」因子（第3因子）と有意な関係があり，「結婚中断」でこの因子を肯定する傾向が最も高く，「就業継続」で最も低くなっている。また，「性別（男）への抵抗」を表す第2因子は，どの属性・特性とも関係がなかった。

以上の分析から言えることは次の三点である。第一に，男子の場合，「運動が得意であること」，あるいは「運動部に所属していること」が，「身体的・精神的たくましさ」という男性性を志向することと強い関係があることが明らかになった。第二に，将来の結婚相手の女性

表Ⅲ-4. 女子のジェンダー意識の3因子と属性・特性との関係(平均, 標準偏差, 及び1元配置の分散分析の結果)

		第1因子 性別(女)の受容		第2因子 関係における男性優位		第3因子 能力の男性優位		
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
成績	上位	107	-0.19	1.19	0.14	1.40	-0.28	1.81
	中位	146	0.10	1.32	0.06	1.56	-0.07	1.77
	下位	157	0.02	1.34	-0.15	1.40	0.26	1.75
	F値		1.666		1.446		3.123	**
運動能力	得意	68	-0.42	1.38	0.43	1.33	-0.29	2.13
	ふつう	225	0.02	1.24	0.13	1.41	0.01	1.71
	苦手	123	0.20	1.29	-0.48	1.51	0.15	1.68
	F値		5.198	**	10.979	**	1.345	
部活動	運動部	183	-0.11	1.23	0.09	1.45	0.08	1.90
	文化部	186	0.17	1.33	-0.05	1.45	-0.03	1.65
	F値		4.503	**	0.921		0.356	
進路希望	高卒後就職	70	0.15	1.38	0.24	1.46	-0.12	1.53
	専門学校	118	0.17	1.28	-0.16	1.49	0.06	1.74
	短大	60	0.35	1.17	-0.09	1.27	0.58	1.75
	4大	108	-0.11	1.26	-0.05	1.48	-0.29	1.89
	F値		1.935		1.195		3.326	**
結婚後の女性 の就業に 対する希望	結婚中断	36	0.24	1.28	0.66	1.58	0.20	1.79
	出産中断	56	0.21	1.18	0.04	1.27	0.11	1.92
	中断再就職	166	-0.02	1.33	0.33	1.30	-0.08	1.70
	就業継続	78	-0.22	1.38	-0.39	1.55	-0.32	1.83
F値		1.626		6.659	**	0.952		

** p < 0.05

に対し性別役割分業を強く求める者ほど、「知的能力の男性優位」を肯定しているということである。第三に、「性別(男)への不満」因子は、ここで挙げた属性・特性とは別の要因によって規定されている可能性が高いということである。

2 女子のジェンダー意識の各因子と属性・特性

次に、女子の場合、「性別(女)の受容」の因子(第1因子)と有意な関係にあるのは「運動能力」と「部活動」である。すなわち、運動が「苦手」であるほど、また、運動部よりも文化部に所属している方が、この因子の得点が高いという傾向がある。これはつまり、女子の場合、運動という要因は、女という性別を受容することとは相反するベクトルを持っているということの意味している。

「関係における男性優位の肯定」を表す第2因子は、「運動能力」と「結婚後の女性の就業」と有意な関係が

見出された。結婚後の女性の就業にかんしては、結婚中断 > 中断再就職 > 出産中断 > 就業継続の順に因子得点が低くなっており、キャリア志向であることが性別役割を肯定しないことと結びついていることがわかる。一方、「運動能力」にかんしては、運動が「得意」であるほど因子得点が高く性別役割に肯定的であるという、第1因子(「性別(女)の受容」とは逆の傾向があることが明らかになった。

「能力の男性優位」を表す第3因子は、「成績」および「進路希望」と有意な関係がある。成績にかんしては、下位であるほど因子得点が高い。すなわち成績が低い者ほど、能力における男性優位を肯定するという傾向がある。進路希望にかんしては、短大 > 専門学校 > 高卒後就職 > 四大の順に因子得点が低くなっている。成績との関係と比較すると、必ずしも希望する学歴が低いほど「能力の男性優位」を肯定するというような単純な関係ではなく、「短大」のような「女性向き」とされる進学先を希

望することと、能力の男性優位を肯定することとが結びついていることがわかる。

以上の分析から明らかになったのは次の二点である。第一に、女子の場合成績が下位であるほど「能力の男性優位」を肯定する傾向があり、さらに「能力の男性優位」を肯定することが、進路選択において、より「女性向き」の進学先を希望することにつながるということである。そして第二に、「運動が得意であること」は、女という性別を受容しない方向に作用する一方で、性役割を肯定する方向に作用するという、ある種のアンビバレントを形成する要因であることである。

Ⅳ 考 察

それでは、これまでの分析によって明らかになったことをまとめておく。

「対社会」と「対自己」のそれぞれ4つの項目を含む合計8つの「ジェンダー意識」項目に対し、男女別に因子分析を行った結果、男女それぞれ異なる3つの因子が抽出された。男子は「身体的・精神的たくましさ」、「性別（男）への不満」、「知的能力の男性優位」の3因子である。それらの因子と各属性・特性との関係を分析した結果、「運動が得意であること」あるいは「運動部に所属していること」が、「身体的・精神的たくましさ」の因子と強い関係にあることが明らかになった。

女子の場合、ジェンダー意識項目の因子分析の結果、「性別（女）の受容」、「関係における男性優位」、「能力の男性優位」の3因子が抽出された。同様に各属性・特性との関係をみた結果、女子にとって「運動が得意であること」は、「性別（女）の受容」と相反する関係にある一方で、「関係における男性優位」を肯定することと強い関係があることが明らかになった。

つまり、「運動が得意であること」や「運動すること」は、男女のジェンダー形成において異なる意味を持っているということである。男子の場合、「運動」という要素は、「男性性」の中でも特に「たくましさ」という側面を形成する。したがって、学校生活において、部活動や学校行事といった形で運動・スポーツへの参加が奨励され、学校適応を促したり評価の対象となったりすることは、男子にとって「たくましさ」という意味での「男性性」を形成するという方向性と合致しているのである。

一方、女子の場合、問題はそう単純ではない。女子にとって「運動が得意である」ということは、「女性であること」との不適応を感じさせる。しかしそのことは、旧

来型の性役割やジェンダー秩序を打破することにはつながらない。むしろ、男性との関係において従属的な立場を積極的に選び取るという、矛盾をはらんだジェンダー形成を促すのである。つまり、女子にとって「運動する」ということは、ジェンダー形成という観点からみて、本質的に矛盾を含んだ身体実践であると考えられるのである。

おわりに

本研究では、中学生のジェンダー意識と運動・スポーツとの関係について、仮説生成的に分析・考察をすすめてきた。したがって、これまで議論は限定されたデータに基づいた仮説に過ぎない。そこで、最後に今回の分析結果をふまえた今後の課題についてふれておく。

第一に、今回提出した運動・スポーツとジェンダー形成にかんする仮説を検証するため、実際にスポーツにかかわる、あるいはスポーツにかかわっていない中学生に対するインタビュー調査をもとに、彼女ら／彼らのジェンダー意識の有り様と、運動・スポーツへのコミットメントとのかかわりを明らかにすることである。男子のジェンダー形成にとって運動の持つ意味はいかなるものか、女子にとって運動というものがジェンダー形成のうえで実際に矛盾を生じさせているのかどうか、といった点がインタビューの焦点となるだろう。

第二に、今回の「ジェンダー意識」の因子分析の妥当性について、さらなる検討が必要である。今回の調査では、8つのジェンダー意識項目を試験的に採用した。だが、言うまでもなく「ジェンダー意識」はこれらの8項目に限定されるものではない。また、ジェンダー形成に大きな影響力を有することが既に指摘されている他の属性的要因と、「運動」によるジェンダー形成への影響力を比較検討しなければならない。したがって、女性の再生産役割に対する意識や、職業世界における平等意識など、近年の研究でその重要性が指摘されているものを含めた多様なジェンダー意識項目、及び母親の就労形態や出身階層などの属性的要因にかんする質問を組み込んだ、さらなる質問紙調査が必要である。

以上の検討を通して、若年男女にとって「運動」というファクターがジェンダー形成にどのような影響を与えているのか、またジェンダー意識によって「運動」へのかかわり方がどのように違ってくるのか、「運動」という身体実践とジェンダーとの相互の連関を明らかにすることが、最終的な課題となる。

(指導教官：藤田英典教授)

注

- 1) 笹原(1999)は、特に定義はしていないものの、「性別役割分業観」や「自身の性の受容度」を指して「ジェンダー意識」という語を使用している。本研究における「ジェンダー意識」概念と非常に近いものと考えてよいだろう。
- 2) 西島ほか(1999)の中の藤田武志執筆分では、運動能力が高いということが、個人の自己評価(「がんばればたいいこととはできる」)や学校適応を高める効果を持つことが実証されている。また、ベネッセ教育研究所(2000)でも、性別にかかわらず、運動が得意な小学生の方がポジティブな自己像を有していることが明らかになっている。
- 3) この共同研究の成果の一部は、西島・藤田・矢野・荒川・羽田野(1999)として既に発表してある。調査の経緯や具体的な調査内容にかんしてはそちらを参照されたい。
- 4) ベネッセ教育研究所(2000)では、関東近県の小学校5・6年生を対象とした質問紙調査(サンプル総計1983名)で、運動能力の自己評価において本調査とはほぼ同様の男女差が見られることが指摘されている。つまり、運動能力の自己評価に見られる男女差は中学生に特殊なものではなく、小学校高学年の時点で既に形成されているということがわかる。
- 5) 1996年に文部省体育局長の委嘱を受けて実施された全国都道府県の中学・高校を対象とする調査によると、中学生の場合、運動部に所属しているのは男子83.0%、女子64.1%となっており、本調査の結果と比較すると男女差が若干小さい(中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議 1997)。本調査の場合、東京という地域の特殊性によって、部活動参加の男女差が大きくなっている可能性もある。
- 6) 江原(1999)は、本研究における「対社会のジェンダー意識」とほぼ同じ意味で、「性差意識」という語を使用している。

引用・参考文献

- ベネッセ教育研究所 2000 『モノグラフ・小学生ナウ vol.20 -1 運動の苦手な子』(株)ベネッセ・コーポレーション。
- Butler, Judith 1990 GENDER TROUBLE Feminism and the Subversion of Identity, =竹村和子訳1999『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社。
- 中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議 1997 『運動部活動の在り方に関する調査研究報告書』。
- Connell, Robert.W 1987 Gender and Power : Society, the Person and Sexual Politics, =森重雄他訳1993『ジェンダーと権力 セクシュアリティの社会学』三交社。
- 土肥伊都子 1994 a 「ジェンダーに関する2種のスキーマモデルの比較検討」『心理学研究』第65巻第1号。
- 1994 b 「心理学的男女両性具有性の形成に関する一

考察」『心理学評論』第37巻第2号。

- 1996 「ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成」『教育心理学研究』第44巻第2号。
- 江原由美子 1999 「男子校高校生の性差意識 男女平等教育の『空白域』?」藤田英典他(編)『教育学年報7 ジェンダーと教育』世織書房。
- 藤田英典 1999 「ジェンダー問題の構造と〈女性解放プロジェクト〉の課題」藤田英典他(編)『教育学年報7 ジェンダーと教育』世織書房。
- 伊藤裕子 1978 「性役割の評価に関する研究」『教育心理学研究』第36巻第1号。
- 柏木恵子 1974 「青年期における性役割の認知(Ⅲ) —女子学生青年を中心として—」『教育心理学研究』第22巻第4号。
- 中西祐子 1998 『ジェンダー・トラック 青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』東洋館出版社。
- 西島 央・藤田武志・矢野博之・荒川英央・羽田野慶子 1999 「中学校生活と部活動に関する社会学的研究 —東京23区内における質問紙調査を通して—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第39巻。
- 尾嶋史章 2000 「『理念』から『日常』へ 変容する性別役割分業意識」盛山和夫(編)『日本の階層システム4 ジェンダー・市場・家族』東京大学出版会。
- 岡田珠江 1999 「第七章 心理学は「男らしさ」を測れるか —質問紙の限界と利用法—」西川祐子・荻野美穂(編)『[共同研究] 男性論』人文書院。
- 笹原 恵 1999 「ジェンダーの『社会化』 「適応」と「葛藤」のはざまから」鎌田とし子他(編)『講座社会学14 ジェンダー』東京大学出版会。
- 山口一男 1999 「既婚女性の性別役割意識と社会階層：日本と米国の共通性と異質性について」『社会学評論』第198号。
- 山口素子 1985 「男性性・女性性の2側面についての検討」『心理学研究』第56巻第4号。
- 大和礼子 1995 「性別役割分業意識の二つの次元 —「性による役割振り分け」と「愛による再生産役割」—」『ソシオロジ』No.123。
- 柳井晴夫・重樹算男・前川真一・市川雅教 1990 『因子分析 —その理論と方法—』朝倉書店。
- 吉原恵子 1995 「女子大学生における職業選択のメカニズム —女性内文化の要因としての女性性—」『教育社会学研究』第57集。